

日韓交流を!!



▲王朝時代の庶民の日常生活が再現されている民族村

▼人口780万人を擁するソウル市内



▲熊本ソウル線開設のテープカット(昨年9月)

本県の海外渡航者は、昨年1年間に26,000人に達し、そのうち最も多いのが韓国で、全体の三割を占めています。地理的にも近く、またわが国文化のルーツともいわれ、歴史、文化のつながりが深いので親しみやすい国だからでしょう。

80年代はわが国の国際化がさらに大きく前進する時代といわれています。熊本もこの大きな波に乗り遅れてはなりません。熊本空港が国内の交通手段としての機能にとどまらず国際空港としての役割をも担うことは本県のみならず九州全体の今後の発展にも大きく寄与するものです。

昨年9月、熊本空港では、国際化を一層推進するため、韓国との間に国際定期便を開設しました。しかし、ようやく開設にこぎつけたソウル定期便の利用がおもわしくなく、低迷を続けております。皆さんからの要望の強い諸外国の都市への新規路線開設の足掛りを築くためにも、熊本空港が名実ともに国際空港として発展するよう県民皆さんのなご一層のご理解、ご協力をお願いします。

わたしの郷土

古川兵藤井手について

私は、自分の家の近くの井手は、どうやってできたのだろうと思ったので調べてみました。一八〇〇年ごろ、大平の村にはたいへん水が不足していました。深い谷を下って川の水をくみに行ったりしていたそうです。

大平の庄屋の五島五郎右衛門はこの有様を見てたいへんかわいそうに思いました。

一五郎右衛門は、大地主の二階堂喜左衛門に井手を引くことをそうだんし協力を得て工事申請書を手永会所と藩に願い出したのが文化九年のことでした。水利権というものは農民の最も尊いしかも絶対の権利でした。大平の人々は一体となってこの交渉にあたりました。井手開さくの許可が出たのは、文化十年三月で下流の方でもどうやら納得してくれました。会所から間部忠右衛門が、かんとくの人にあたり、五郎右衛門や喜左衛門その他の人が工事現場の指揮に選ばれました。血みどろの苦心が三年間も続きのべ人数一万八千三百六十三人総工費三十五貫七百三十匁という莫大な工事費長さ一万六千三百メートルの井手が出来上りました。それから十五年も過ぎましたが、となり合わせにある戸豊水太田村などは昔のまま哀れな姿でした。戸豊水太田村でも水がほしくて庄屋平山八左衛門たちが井手を造る計画をたてました。笹野川から、兵藤峠を廻りぬき鉾川に落ち古川井手に合うように設計しました。兵藤は日田の領内で、日田代官や幕府の認可を得るためにたいへん苦労しました。文政十年幕府の認可もあり、日田や菊池川との交渉もまとまりその年九月に起工式の運びとなりました。工事を始めて突に十年の月日が流れ井手がかんせいしました。

私は井手を造るのに昔の人々がこんなに苦労したんだあとはじめて知りました。これからは、井手をよごさずに、水もたいせつにしていきたいと思えます。

菊池市立豊間小学校五年 高木千代美